

虚言世界への「イニシエーション」

——「傷逝」の物語内容——

北岡正子

魯迅の第二小説集『彷徨』に収める短篇「傷逝」(一九二五・一〇)は、氣になる作品である。読後、子君の死の上
涓生の生が予定されて終る非情さに、承服出来ぬ不快を覚えるのに、彼らを導く摂理には、抗い難いものを感じるの
ある。相反する二つの感慨が同時に生ずるのは何故なのだろうか。この不合理に匿されているらしい作者のメッセー
ジを分析してみたいというのが、「傷逝」論を書こうと思った一つの動機である。

「傷逝」を論じた文章は、中国では、文革以後、就中八〇年代になってから、かなりの数に上る。中には、今、彼国で
流行しつつある比較文学的手法による論も二・三あるが、大部分は、作品を社会的批評のレベルで論ずるものである。⁽¹⁾
作中人物の生活を五四期の青年男女の人生に擬し、作中人物の思想、行動をその一つのサンプルとして検証する態のも
のである。数の割には論調は多彩であるとはいえず、何十篇の文章を読んでもモノクロームの印象を免れ得ない。一
方、日本に於ける「傷逝」論は、数は少ないが、その論調に概括できる特徴はない。が、この作品のテーマが、必ずしも
明解なものとは考えられていないことが、共通して分る。「難解」「不分明」を解き明そうとする試みを以て書かれた論

(2) 文には、内外の「傷逝」論の論旨を整理して論者の立論の視点を定める、作者魯迅の伝記的事実を作品成立の背景に据える、作品内容を論者の読みとして再構成する、「傷逝」と同時期に書かれた魯迅の他の作品との構造上の共通性を視野に入れる等、その工夫・立論に興味深いものがある。ここには、多様なレベルの作品論の胚胎がある。

一般に、作品を論ずる場合、その作品に内在するもの（物語そのもの）と外在するもの（作者の伝記、他の作品、批評等）とを、作品説明の手掛りとして用いる。私はこれまで、作品説明の上で両者が担いうる範疇を渾然とさせたまま、この二つを関連づけて用いてきた。だが、最近、作品が作られたもの、即ちフィクションであるからには、その作品の作りを考えることを、作品論の基礎にしなければならぬのではないか、少くとも、一つの作品論の中でレベルの違う観点を設定する場合、論者はそれを意識して使いわけが必要があるのではないか、と考えている。これまでの「傷逝」論にみられる、作品中の出来事や人物の思想・言動を任意に取り出して、それを作者の、或いは同時代の青年達の実人生や思想と短絡させた論や、作品の部分を任意に全体から切り離して作者の伝記的読みを試みた論等には、「傷逝」が作品として語るものに論者が耳を塞いでいるため、作品解釈に恣意的に拡大された歪みが見られ、私は、作品論としては不満を感じている。では、私が、フィクションとしての作品にどこまでこだわることが出来るのかといえば、力量の上で甚だ心もとない。が、まずは、「傷逝」論の手始めとして、読後抱いた自分の素朴な感想が、作品の作りとどう関っているのか、この小説の物語内容の骨組みについて、私の解釈を示しておきたいと思う。本稿は、「傷逝」論としては、上述の「基礎」作業のその一部にすぎない。今後、さらに、論を続けてゆくつもりではある。

二

「傷逝」は、主人公涓生が、過去一年ほどの生活に起った出来事を反芻し、現在の「悔恨と悲哀」を綴る手記という

形式で書かれた小説である。「悔恨と悲哀」の誘因となった出来事は、すべて、手記を綴る涓生の視点を通してのみ読者に示される。小説では、冒頭と結末が、手記を綴る涓生の現在に連続し、中間に、出来事のあった過去が挿入されている。この小説に与えられているプロットは、大まかに言えばこうなる。

このプロットからクロノロジカルな順序に従い、情況を単位として、ストーリーを再構成すれば、

一 涓生と子君の愛が成就するまで。(交際の期間——暮春までの約半年)
二 涓生と子君は、吉兆胡同で共同生活を始める。生活に経済的裏づけがあり、二人の生活意識の違いは顕在化して
いない。(双十節まで)

三 涓生が失業する。生活が困窮し、二人の気持の齟齬が明らかになる。(真冬まで)

四 涓生が愛の破綻を宣言する。しばらく共同生活は続く。(冬春の交まで)

五 子君が父親につれ去られる。やがて涓生は子君の死を知る。(その後すぐ)

六 涓生は吉兆胡同の住処を離れ、元の住処会館へ戻る。手記を書く。(初春の頃)

となる。プロットの組立ては、六、一、二、三、四、五、六の順序になる。

場所は、一、六が会館、二、三、四、五が吉兆胡同である。経過した時間は一年数ヶ月、うち、双十節までの約一年の期間は、一応、二人の関係は親密なものであったと考えてよいだろう。それに対し、二人の不和の期間、涓生の失業以後子君が家を出るまでの期間は、親密であった期間の約半分である。しかし、小説では、時間の長さに比して叙述の分量が配されているのではなく、不和の期間に関する叙述の分量の方が断然多い。不和の表現に重点がかかっているわけである。

ストーリーは二つの場所を一巡して展開する。始めに会館、次に吉兆胡同、終りに会館。一では、涓生の、希望に向

つての脱出が表現されている。涓生は、子君に自由恋愛、自由結婚の新思想を吹き込み、鼓吹者以上に決然とした子君の言動に力を得、それを拠所に「静けさと空虚」に満ちた生活から脱出する。六では、子君との共同生活からの、涓生の帰還が表現されている。涓生が戻ったのは、以前住んでいた会館の同じ部屋である。室内の様子、窓からの眺めは、以前と寸分の変わりもない。涓生自身、会館を去っていた一年の時間が消滅してしまつたような錯覚に陥る。始めと終りの場面は、一見同じである。だが、そこに居る涓生は、以前と同じではない。涓生の変化は、この消滅してしまつたかのような時間——吉兆胡同での生活の間に起きた出来事に由来するのである。涓生が手記を綴る動機もこの間にあり、ストーリーの大部分もこの間に於いて展開する。

吉兆胡同を舞台とする、二、三、五の表現内容は、ざっと次の如くである。先ず、二人の共同生活は、外界に背を向け新居を構えることで、ようやく成立する。二人が実行に移した新思想が、その時の社会通念に乖離していたためである。二人は、親族や友人との往来を断ち、閉された幸福な世界を獲得するが、やがて、二人の生活に対し懲戒の意味をもつ涓生の解雇で、命脈を断たれ、幸福な状態の維持が困難になる。生活の窮乏につれて、涓生の子君に対する愛は冷め、現状からの脱出を願うようになり、ついに破局に至る。

読者は、この閉された世界が、内部から崩壊してゆく有様を、涓生が、彼の主観でとらえた二人の心理的關係を通じて描きとるのを、読むわけである。「傷逝」は、涓生が語るこの二人の不和の「物語」(吉兆胡同で起きた出来事)を、中心に嵌めこんで出来た小説になっているのである。

三

では、中心に嵌めこまれた「物語」は、二人の心理的關係を軸としてどう展開するのであろうか。情況の変化に即し

てみてゆくことにする。

〔情況 二〕

新生活を始めた二人は、「永遠」に続いてゆくに思える「平穩」と「幸福」の中にある。涓生は、相手に未知の部分がなくなり、同じパターンで生活を繰り返すことにいら立ちを感じはじめた。子君は、家事を主宰することに自ら落着く場を見出し、肉づきもよく、血色もよくなって来る。この段階では、涓生と子君の關係が、生活の変化を希求する者と、生活を恒常的狀態に維持しようとする者との対比によって語られている。愛情とは、常に更新し、育て、創造してゆかねばならぬもの、と考えるのは涓生であり、プロポーズの場面を、細大漏らさず記憶に留め、相手に再演させて幸せを感じているのは子君である。二人の生活意識のずれが、隱微な形で表われ始めている。

1 我曾經忠告她：我不吃，倒也罷了；却万不可这样地操勞。她只看了我一眼，不開口，神色却似乎有点凄然；我也只好不開口。然而她还是这样地操勞。

私は彼女に忠告した、——ぼくは食わなくても構わないよ。そんなにあくせく働くなよ。彼女はちらりと私を見て返事もせず、何がし悲しげな表情でさえあった。私も仕方なく黙った。だが、やはり彼女はあくせくと働いた。

〔情況 三〕

「平穩」で「幸福」な二人の生活の基盤をゆるがす出来事——涓生の解雇により、情況が轉換すると、漠としたものであった涓生の生活の〈変化〉への指向が、これから獲得すべき生活にかける、新たな期待となつて、活性化してくる。

解雇通知を受けた時、涓生には困惑の表情はなく、予期していたものに立ち向う張りすら感じられる。

2 「说做，就做罢！来开一条新的路！」

「やると言ったら、すぐやろう！ 新しい路を開くのだ！」

「新しい路」は、以後、涓生を導く指標となり、ストーリーを展開させてゆくキーワードとしてしばしば用いられることになる。⁽⁷⁾ 一方、子君は、生活の〈恒常〉的状态が失われてゆく予感を覚え、不安と怯懦の表情をあらわしてゆく。子君の表情は、丁度、涓生の「新しい路」への憧れが渴望へと度を増してゆくのに見合うようにして、生活の緊迫につれ凄涼の相を深くしてゆくのである。涓生が以前垣間見た、「何がし悲しげな」表情は、解雇の後、ニワトリをつぶした後、飼犬を捨てた後と、順次痛ましさを増してゆくのだが、涓生にはその変化の心理的意味が分らず、子君の変貌に戸迷い、訝り、不平を覚えるばかりである。

3 ……转眼去一瞥她的脸，在昏暗的灯光下，又很见得凄然。我真不料这样微细的小事情，竟会给坚决的，无畏的子君以这么显著的变化。

……彼女の顔にちらりと眼をやると、ほの暗いあかりの下で、とても悲しげに見えたのである。かように些細なことが、決然として畏れることなき子君を、こんなにながらりと変えてしまうとは、私は考えてもみぬことであつた。

4 只有子君很颓唐，似乎常觉得凄苦和无聊，至于不大愿意开口。我想，人是多么容易改变呵！

だが子君の方はひどくしよんぼりしてしまい、何時もたまらぬ悲しみと味気なさを感じているようで、とうとう、あまり口もきこうとはしなくなった。私は思った、人はなんと変り易いものなのだろう。

5 但子君的凄惨的神色，却使我很吃惊。那是没有见过的神色，自然是为阿随。但又何至于此呢？

しかし子君の痛ましく悲しげな表情に、私はぎくりとした。それは、これまで見たことのない表情であった、もちろん阿随のためである。だがそれにしても、何故こんなにまでなるのだ？

が、涓生も、はじめは、自分と子君は同じ心情であると思っていたのである。

6 大家不約而同地伸直了腰肢，在无言中，似乎又都感到彼此的坚忍倔强的精神，还看见从新萌芽起来的将来的希望。

二人は期せずして一緒に腰を伸し、無言のうちに互いの堅忍不拔の精神を感じとり、さらに、新しく芽吹きはじめた将来の希望を見たが如くであった。(傍点筆者)

7 外来的打击其实倒是振作了我们的新精神。

外からの打撃は、だが、実は我々の新しい精神を奮立たせたとしたのであった。(傍点筆者)

しかし、出来事の度に意外な子君の表情に出遭い、「新しい路」は次第に涓生一人の目標となり、ついに、子君は自分の渴望の前に立ち塞がる存在である、と認めるに至る。

8 ……，然而只要能远走高飞，生路还宽广得很。现在忍受着这生活压迫的苦痛，大半倒是为她，便是放掉阿随，也何尝不如此。但子君的识见却似乎只浅薄起来，竟至于连这一点也想不到。

……、だが、遠くへ脱出出来さえすれば、生きてゆく路はまだ広いのだ。今、生活の逼迫した苦しさを我慢しているのは、大半が彼女のためではないか。阿随を捨てたのだから、そのためじゃないか。だが、子君の考えは、どうも浅墓になってゆくばかりで、こんなことすら念頭に浮ばなくなってしまったのだ。

二人の人物の形象が担う〈変化〉と〈恒常〉の二要素は、涓生が子君を対立者として認識した時に、対比ではなく葛藤の相をとりはじめるのである。

この葛藤の様相を考えるために、ここでストーリー展開に主要な役割をもつ「新しい路」の描かれ方を検討しよう。まず、「新しい路」で表現されるものは、その具体的な実体が明らかではない。涓生の観念に留まるものである。従っ

て、涓生の願望の表現以上のものではないのである。その願望は、子君の表情や素振りが涓生の理解からずれてゆくその距離だけ緊急度を増して涓生の心を占めてゆくというもので、ここに見て取れるのは、反撥すべき対象を一方に置いて、その対象に反撥する力（反作用）で、もう一方にある願望へ近づいてゆく、という仕組みである。反撥の対象はそれに較べると具体的である。現状の維持に腐心する子君であり、子君のいる現在の家庭である。

が、子君を自分の願望にブレーキをかける存在であると考えている涓生は、子君との生活に「空虚」を感ずるようになり、己の心に忠実に生き得ぬ「虚偽」に苦しみはじめた。この「空虚」は何を表現しているか。まず涓生の子君に対する心にもないその場しのぎの慰めが「空虚」である。更に、かつての子君の理想に満ちた思想や言論も、それを失った現在の子君にはすでに「空虚」なものだ（と涓生は考える）。この「空虚」は、あくまでも、実体の喪失、欠如に気づいた涓生だけがもつ感覚の表現なのである。「虚偽」の表現する内容は、自分の心変りを子君に伝えずに以前と同じ生活を続けてゆくことである。求愛の復習は、子君にとっては、涓生の心を手繰りよせる唯一の手掛りなのであるが、涓生にとっては、「息のつまる」ような「虚偽」の行為である。「虚偽」も又、涓生の意識にのみ属するものである。

9 ……； 假如没有这勇气，而苟安于虚伪，那也便是不能开辟新的生路的人。不独不是这个，连这人也未尝有！

……、仮りにこの勇気がなく、虚偽に安んじていたら、それは、新しく生きる路を開くことは出来ない人だ。それだけでではない、人ですらあり得ないのだ。⁽⁸⁾

涓生の思考は、虚偽の拒絶こそが「新しく生きる路」に通ずるものなのだという地点に辿りつき、二人の離別に「新しい路」実現の希望を託し、子君が決然として家を出てゆく姿を想像するに至る。このことは、現在、涓生に対して「新しい路」への願望をかき立てる役目を果しているものが、涓生が「新しい路」へ出立する時には障物となること、即ち、否定的媒介者は抹殺の運命を辿るということを暗示している。

10 — 我也突然想到她的死，然而立刻自责，忏悔了。

——私もふと彼女の死を考えた。しかし、すぐ自责の念にかられ、悪かったと思った。

涓生の無自覚の願望——抹殺の予期は、〔情況 四〕に亘って、繰返し記されることになる。

要するに、葛藤する〈変化〉と〈恒常〉の二要素は、拮抗の状態に置かれているのではなく、事態展開をリードする涓生と、それに触媒として速度を加えている子君との、主従の關係に配されているのである。子君の変容は、一貫して涓生の原理から解釈されているのである。

〔情況 四〕

ここに至り顯著になるのは、「新しい路」に踏み出すことを「生活」の第一義とする涓生の原理が、あくまでも確乎としており、そのために子君を見る目が塞がれていること、抹殺の予期が次第に涓生の意識にのぼり、現状脱出の願望と重なってくることである。涓生が子君への愛を失ったことを告げた時、子君は絶望と恐怖の表情をありありと浮べたのだが、その子君の反応は、涓生の目には意外なものとなる。涓生の現状脱出の願望はさらに募り、子君の死を予期する気持が又頭をもたげ、なおも重ねて、子君が毅然として家を出てゆくさまを想像する。それにより「新しく生きる路」がすぐにでも開けてくるように思い込むのである。

〔情況 五〕

実際に子君が家を出て行った時、涓生は、子君が、想像とは異なり父親につれ戻されたのであること、去り際になお、後に残る涓生の生活に配慮をしていたことを知る。涓生は愕然とはするのだが、気を鎮めると、又もや脱出の実現が近いことを思うのである。

11 心地有些轻松，舒展了，想到旅费，并且嘘一口气。

心が何かしら軽くなり、のびやかになった。旅費のことをおもうと、ふうっと息を吐いた。

子君が涓生の前から姿を消して二人の共同生活は終る。「物語」を展開させて来た二人の関係も同時に消滅したことになる。かくて、子君の死が伝聞の形で記され、涓生が会館に戻ったことが記されて後、涓生の語るべき「物語」は終るのである。小説に於ける二〇五は、事実を語った場面である。

四

涓生の原理に従えば、子君の失踪により、一挙に「新しい路」が我がものとなる筈である。だが、子君の失踪は、涓生に、想像と実際の相違を気づかせる結果をもたらし、涓生の自省が始まるのである。即ち、涓生が物語った事実——吉兆胡同での共同生活——の意味が、問われ始めるのである。小説は五より、事実を語る場面から、その事実の意味を与える場面に移行することになる。⁽⁹⁾

涓生は徐々に、かつて子君は愛故に勇敢であったこと、今は「空の重荷」⁽¹⁰⁾を背に峻厳と冷眼の中に在ることに思い至り、自分の見ていた子君像が幻であったことを悟る。かつ、自分の告げた「真実」が子君を奈落につき落してしまったことに気づき、自責にかられるのである。

12 我不应该将真实说给子君，我们相爱过，我应该永久奉献她我的说谎。如果真实可以宝贵，这在子君就不该是一个沉重的空虚。谎言当然也是一个空虚，然而临末，至多也不过这样地沉重。

私は、真実を子君に話すべきではなかった。私達は愛し合ったのだから、永遠に私の嘘を捧げるべきであった。もし真実が大事なものであるならば、それが子君にとって重い空虚であってはなるまい。嘘ももちろん空虚にはちがいないが、つまりは、こんなにまで重くはならぬのだ。

涓生の自省の中心テーマとしてここに登場する「真実」は、どのような意味を含んでいるのだろうか。「真実を子君に話す……」とか「私には虚偽の重荷を担う勇気がなかった、なのに真実の重荷を彼女の肩に卸してしまった」と表現される場合は、「真実」が、涓生が子君を愛さなくなった事実を指していることは明らかである。それに対して、「真実が大事なものであるならば……」とか「真実なる者であろうと、虚偽なる者であろうと」とか「真実は心の創に深くしまつて……」等と表現される場合には、様々なものをその実体として含みうる「真実」一般に意味は拡大する。「真実」という同一の語に、個別と一般の両様の意味が与えられているわけである。

涓生が己の「真実」を「真実」一般に敷衍していることから、何が考えられるであろうか。涓生が虚偽の生活に息が詰ったということは、それまでは己の心に忠実に生活していたことの謂でもある。涓生が子君への愛を失ったことが「真実」であるのと同じく、かつて子君に求愛したのも涓生の「真実」であった筈だ。子君との出会いから別れに至る涓生の一年余の生活は、「真実」に始り「真実」に終わったもの、「真実」の範疇に於て営まれていたものと解していいだろう。その「真実」に立脚した生活は、今、痛恨の生活として反芻されている。「真実」が子君を破滅させたが故にである。むき出しの「真実」には人生を破壊する力もあることが、漸く、涓生に理解出来たのである。それは、涓生が、「真実」に言及する時、重苦しく否定的な雰囲気がつきまとう所以にもなる。「真実」の生活の辿り着いた所は子君の死である。即ち、その先に生はあり得ぬことを、涓生は否応なしに認識させられたのである。

五

涓生は子君の因縁から逃れるようにして、会館へ戻る。会館のたゞずまいは、以前と全く同じである。が、戻つて来た涓生は、以前の涓生ではない。

13 会馆里的被遗忘在偏僻里的破屋是这样地寂静和空虚。时光过得真快，我爱子君，仗着她逃出这寂静和空虚，已经满一年了。

会馆の、片隅に忘れられたボロ部屋は、かくの如く静かで空虚である。時の流れの何と早いことか。私が子君を愛し、彼女をたよりにこの静けさと空虚からぬけ出してから、もう満一年になる。

41 ……在一年之前，这寂静和空虚是并不这样的，常常含着期待；期待子君的到来。

……一年前、この静けさと空虚は、かようではなかった。いつも期待を含んでいた。子君がやってくる期待を。

涓生は「真実」の生活に失敗し、「彼女をたよりに」脱出した筈のその場所に戻った。戻って来た涓生が以前の涓生と異なるのは、「真実」に拠っては生きれぬことを識ってしまったことにある。「真実」の生活というトンネルをくぐり出て帰還した涓生が、再びその入口をさぐり当てることはないであろう。⁽¹¹⁾

子君の死後、「新しい路」への期待が、又、涓生の心に兆すのであるが、これも涓生とともに変貌しているのである。かつて、「新しい路」への願望は、子君の存在を障碍と見做し、子君の生き方に対する歯がゆさをバネとして、強まってきたものであった。詮じつめれば、二人が共同生活を解消し、それぞれ新しい生活を求めて勇躍旅立つことが、涓生の思い描く「新しい路」の到来であった。「世界には、奮闘するものの為に開かれぬ活路はない」筈であった。「その道理を解せぬ」子君は、涓生には、追いつがって前進を阻み死に引き戻す存在に見えたのである。涓生は、家庭を象徴する子君の存在と遠く離れたところに、「新しい路」を夢想していた。

15 屋子和读者渐渐消失了，我看见怒涛中的渔夫，战壕中的兵士，摩托车中的贵人，洋场上的投机家，深山密林中的豪杰，讲台上的教授，昏夜的运动者和深夜的偷儿……子君，——不在近旁。

部屋と閲覧者が段々に姿を消し、視野に、荒波の中の漁師、塹壕の中の兵士、自動車に納ったお歴々、租界のや

ま師、深山密林の豪傑、教壇の教授、暗がりて立ち回る者と真夜中の泥棒が現われた。子君は——傍にはいなかった。

この些か荒唐な「新しい路」のイメージは、子君の絆を離れた自由の心象として、くりかえし涓生の脳裏に浮び出る。要するに、この時の涓生の所謂「新しい路」は、子君の存在を否定的媒介として模索され、子君の棲む所からの脱出を結論としたものである。「真実」の告白による二人の離別は、脱出のために不可欠な条件であった。

では、子君の死とともに再び涓生の心に兆した「新しい路」の期待が、以前のものと異なる点は何であろうか。まず、「新しい路」の実現を媒介するものがないということである。「新しい路」の期待は、涓生をとりかこむ「死の静寂」の疎密の間に仄見し、見定めようとするや消えてしまふところのないもの、として暗示されている。

16 死的寂靜有时也自己战栗，自己退蔵，于是在这绝续之交，便閃出无名的，意外的，新的期待。

死の静寂がひとりでに震え、縮んでゆく時があつて、するとこの断続の間に、名のない、思いがけない、新しい期待がちらりとみえる。

17 有时，仿佛看见那生路就像一条灰白的长蛇，自己蜿蜒地向我奔来，我等着，等着，看看临近，但忽然便消失在黑暗里了。

時には、その生きる路が、白っぽい長い蛇のように、身をくねらせながら私の方へはしり寄って来るのが、見えるような気がする。私は、それを待ち、それを待ちして、近づいたのを見る。が、ふっと暗闇に掻き消えてしまふのだ。

ここで読者に知らされるのは、「新しい路」の期待が、涓生の感性の領域にとりとめなく浮遊していることだけである。次に、「新しい路」の展望を表現するものが、皆無であるということである。荒唐なイメージすらない。涓生は、

「悔恨」と「悲哀」を記して子君を葬い、二人の生活を忘れることを、「新しい路」の「第一步」とする。涓生にとって確かなのは、過去を抹消し、何もない風景の中に踏み出す、この「第一步」のみである。「新しい」という表現には、過去とは全く異なる、という意味があるだけで、何のプラスの価値も付与されてはいない。

18 我活着，我总得向着新的生路跨出去，那第一步，——却不过是写下我的悔恨和悲哀，为子君，为自己。

我仍然只有唱歌一般的哭声，给子君送葬，葬在遗忘中。

我要遗忘；我为自己，并且要不再想到这用了遗忘给子君送葬。

我要向着新的生路跨进第一步去，我要将真实深深地藏在心的创伤中，默默地前行，用遗忘和说谎做我的前导……。

私は生きているのだ。新しく生きる路に歩を進めねばならぬ。その第一歩は——が、私の悔恨と悲哀を書き記すこと以外にない。子君のために、自分のために。

私も、やはり唱うように泣く他はない。それで子君を葬るのだ。忘却のうちに葬るのだ。

私は忘れねばならぬ。自分自身のために。かつ、忘却によって子君を葬ったことも二度と考えるはならぬのだ。

私は、新しく生きる路に第一歩を踏み出さねばならぬ。真実は心の創に深くしまつて、黙って進んでゆかねばならぬ。忘却と虚言をわが先導として……。

それまで涓生を導く燈火であった「新しい路」は、「真実」の境から戻った時、過去の抹消を第一歩とする「新しい路」に変化していたのである。

「真実」の世界では生の継続が不可能であること、生は「虚言」の世界に求むべきこと、これが、涓生が過去の〈事実〉から得た〈意味〉である。生きているということは、この「虚言」の世界に身を置くことである。ここに第一歩を踏み出すためには、生が許容されなかった「真実」の世界は、記憶から消さねばならない。涓生にとって会館を去って

いた一年の時間が消滅してしまったように思えるのは、単にたゞすまいに変化がないことの表現だけではないだろう。「真実」の世界での隔絶された生活の経験が、生きている以上、「虚言」の世界に定住する以外の選択はないことを、涓生に知らしめたのである。この認識を得たことにより、涓生は「虚言」の世界の住人としての資格を獲得し、「生きている」のである。「真実」の世界の案内人——子君の死をパスポートとして生への帰還をなし遂げたのである。たとえ、今、「悔恨と悲哀」に付き纏われていても、生は涓生のものである。

以上、「傷逝」の物語内容から、イニシエーションに類似した骨組みが見えてくるように思う。

注

(1) 文革以前の「傷逝」論については、太田進氏による詳細な紹介がある（「傷逝」試論 一九六七）。文革以後のものは、筆者の知る範囲でも、以前のものの重版も含めて、五十篇余、うち約半数が「傷逝」を単独に論じたものである。

(2) 太田進 「傷逝」試論（一九六七）、丸山昇 「傷逝」札記（一九八一）参照。

(3) 前者は、社会的批評のレベルの論に多く見られる。又、三宝政美 魯迅「傷逝」試論——そのモチーフをめぐって——一九八〇は、後者の一例である。

(4) 物語内容は、ジェラルド・ジュネットの用語による。物語られている内容（物語られ方——言説ではなく）のことである。ジュネットは、Gerard Genette *Discours du récit, essai de méthode* 1972 『物語のディスタンス』（花輪光 和泉涼一訳 一九八五）で、「物語の実態を構成する三つの相」を、「物語内容 (histoire)」「物語言説 (récit)」「語り (narration)」と呼ぶことを提案している。

(5) 情況は、ボリス・トマシェフスキーの用語による。その「テーマ論」(一九二五)によれば、物語の筋は、さまざまな利害や結びつきによって関係づけられた複数の登場人物を導入することで展開する。この、ある与えられた時に於ける相互の関係が、「情況」である。情況を変化させるのは、動的モチーフ (dynamic motifs) である。(Boris Tomashevsky "Thematics" tr.

by Lie T. Lemon, Marion J. Reiss 1965)

(6) 本稿では、小説の物語内容全体を指すものとは別に、限定された(涓生が語る)部分を指すものとしても、「物語」の語を用いる。

(7) 「新的路」で表わされるものは、以後、「生路」「活路」「新的道路」「生活的路」「新的生路」等々の表現でも出てくる。太田氏はこれを「この作品の主調低音」であると指摘する。

(8) 「新しい路」を開くことができなければ、人として存在する資格すらない、と解釈する。訳として他に、「いや、開拓できないどころか、人間存在そのものが無だ。」(竹内好訳)、「それだけじゃない。そのような勇気がなかったら、人間そのものが、地上に生まれてくることはなかったろう。」(丸尾常喜訳)等がある。

(9) 「情況 五」には、二つの場面が含まれるのである。子君の失踪と死は、場面を転換させるための出来事であり、小説の構成上、重要な役割をもっている。丸山氏の、「⑮までは、涓生の『悔恨と悲哀』は、手記に直接吐露されず」、「⑯以下、彼の『悔恨と悲哀』が作品の前面に出て来る」という解釈も、「傷逝」に於ける転換点の指摘とみられる。

(10) 原文は、「虚空的重担」。「傷逝」には、「空虚」と「虚空」の二つの語が出てくる。意味が似通っているためか、二つを区別しない論者、訳者の方が多い。丸山氏は、「空虚」と区別して「空しい」と訳されている。作者はやはり「空虚」と「虚空」は区別して用いていると思う。

(11) ここに見られるのは、主人公が異の世界(桃源郷、天上界、夢境等)に旅立ち、そこでの体験から新しい価値を獲得し、別の人間になって元の世界に戻る話と通底する型である。

付記 本稿は、お茶の水女子大学中国文学会大会(一九八二・四)及び、中国三十年代文学研究会(一九八三・七)での報告を基に、かなりの改変を加えて書いたものである。